

## 『レディング獄のバラッド』をめぐって

貝 嶋 崇  
(比治山大学助教授)

『レディング獄のバラッド』(以下『レディング獄』)は、1898年2月13日、ロイヤル・アーケード社から出版された。当時悪名が高かったレナード・スミザーズの編集で、31頁あり、価格は2シリング6ペンスだった。

これまで、『レディング獄』が最初に構想された時期は1897年の夏であるとする説が有力であった。これは、1897年6月1日付けの書簡でワイルド自身が、『レディング獄』に付いて初めて言及しているからだ。ほかに、モデルとされるウルドリッジの事件が1896年に起こっていること、また、その時期はワイルドが獄中に入れられることから受けたはげしいショックからある程度立ち直り、創作意欲がわくのに合理的な時期だと考えられるからである。

しかし、ワイルドは、ロバート・ロス宛の1898年4月付けの書簡で「この『レディング獄』のアイデアが浮かんだのは、被告席で判決を待っている間だった」と述べている。これはそのアイデアが最初に浮かんだのは1895年であるということの意味している。この書簡が本人が言ったものであるにせよ、モデルとなった事件の起こる1年も前のことであることから、いかに本人が主張していることとはいえ、それを信じるべきかどうかは即断すべきではないが、「アイデア」をウルドリッジをモデルにした『レディング獄』と限定的に考えずに、もっと漠然と獄中の出来事を主題にした作品のアイデアとすれば、1895年に被告席に座らせられ判決を待つときでも可能であろう。

そうした見方で読み直してみると、『レディング獄』のなかで、モデルのウルドリッジの事件の事実関係と異なる部分がとても気になってくる。例えば、『レディング獄』の中では、ウルドリッジはその妻をベッドで殺害したことになっているが、実際は、ウインザーのグレート・ウェスタン駅とクルワーという村とを結ぶアーサー街道上で殺害している。また、凶器も『レディング獄』ではナイフとなっているが、実際は、カミソリだった。こうした事件の際、大切な殺害の方法に関してさえこうした食い違いがあるのである。

また、刑務所長の顔色をワイルドは、実際とは異なることを書簡の中で告白している。さらには、『レディング獄』の中の描写は、実際とはまったく異なる。すべては、アブストラクトだ」と言い切っている。

このことから、『レディング獄』はウルドリッジの事件をモデルとしただけで、ウル

ドリッジの悲哀を描くのが主題ではないことは明白である。

それでは、いったい何を主題と考えればいいのか。それは、バラッドのなかに繰り返しててくるフレーズを読めば充分である。

「その男は、愛するものを殺めた。だから、死なねばならない」

このフレーズは、ワイルド自身が当時抱いていた深い悲哀を意味している。愛するものを失った悲哀である、いや、愛するものを自ら放棄しってしまった悲哀である。

愛するものを失う悲哀をワイルドは何度も経験した。腹違いの姉妹の焼死、実の妹アイソラの死、父の死、さらに、獄中で知らされた母ジェインの訃報。とくに、母の死は1896年2月3日のことで、その時期はワイルドが収監されてからまだ3ヶ月足らずの時だった。ワイルド家の名声を傷つけたワイルドにとって、母の死は、その汚名を永遠にそそぐことができなくなったということの意味していた。さらに、自らの引き起こしたスキャンダルで、法的に妻と息子達を失ったことも、ワイルドの失意をより大きなものにしたに違いない。

こうした、愛するものを失う悲哀をワイルドは、ウルドリッジの事件を利用し、ウルドリッジの心に仮託して吐露したのである。これは、事実を重視せず、芸術のためには粉飾を厭わないというこれまでワイルドが主張してきた芸術観と一致している。

作品を完全なものにするため、ワイルドは、多くの詩人や作家からそのエッセンスを取り入れた。これまで、あがただけでも、6作品以上ある。コーウリッジの『老水夫行』、トマス・フッドの『アラムの夢』、テニソンの『イン・メモリアム』、ハウスマンの『シュロップシャーの若者』、W. E. ヘンリーの『入院して』、キップリングの『ダニー・ディーパー』等である。ほかに、あげれば、シェークスピアの「臆病者は何度も死ぬ」といったフレーズ等が思い起こされる。

こうした、種々雑多のエッセンスの為に、全体として統一性を欠いたものになった。しかし、そうした、文体の僅禍を補って余りある深い悲哀の表出にこそ耳を傾けるべきであろう。